

湿原の植物

新庄 久志(釧路市立博物館)

冬の湿原を展望すると、夏には確認することがあずかしい植生の景観がうきぼりにされている。ハンノキ林の高木林、低木林は黒褐色の濃淡をもって登場し、ミズゴケ湿原は茶褐色、ヨシ湿原はセピア色、スゲ湿原は純白の雪原。そして湖や池沼は白い斑点となり、河川や夏はかくれていた流路が蛇行する白線となっとうきびてくる。

道東の海岸線は、“湿原地帯”といつてもよいほど湿原が連続して点在する。湿原形成の主要な要因は春-夏に発生し、海岸線をおおう海霧であるが、植物生育期に冷涼多湿となる気候は、植物の生育をめやすとする湿量指数(晴かさの指数)にもあらわれ、湿量指数45m.d.ラインの分布と湿原はほぼ重なり、これは、サハリンのネバリスクに類似する数値である。

また、これらの湿原は、かつて内湾であった低湿地に形成されたという点でも一致している。湿原形成の段階を、これらの湿原をたどって観察することもできる。つまり、一部はまだ汽水の内湾をいづくヨシ・スゲ湿原の風連湿原を初期のステップとするならば、ヌマガヤ・ミズゴケ湿原の兼多布湿原がオオステップ、さらにミズゴケのハンノキが飛遷する標津・落石湿原といった遷移系列である。

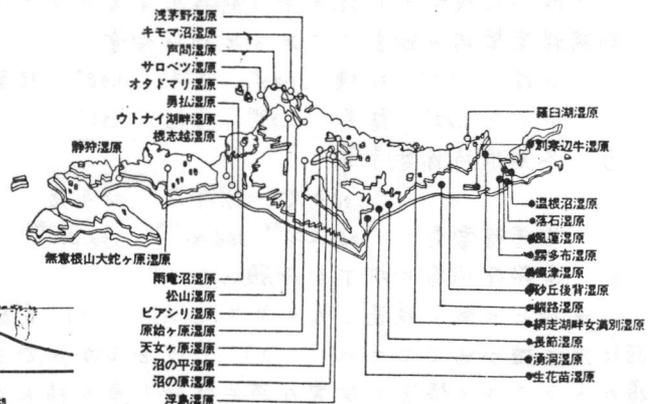
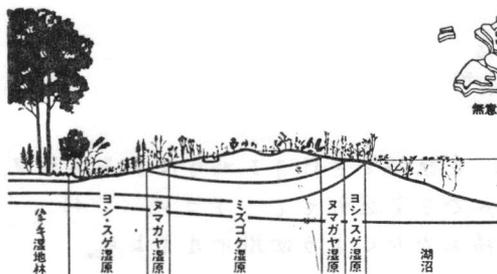
釧路湿原はその中において、湿原遷移の様々な場面をみる事ができる。

湿原の地積の約80%はヨシ・スゲ湿原である。ミズゴケヨウ、エンコウソウの開花で春を向かえ、網目状に河川が蛇行し、湖や池沼が点在する。流路がたえず変化するため、ある意味では遷移を逆もどらせる閉鎖的サイクルの存在も示唆している。池沼はミツガシマ、ユルスゲなどの植物にしばしばうめられ、“谷地子なこ”はその過程で登場する。

ミズゴケ湿原の地積は全体の2%にみえないが、やはり、当地の湿原植生のクライマックスである。チャミズゴケ、イボミズゴケがフルトをつくり、オオミズゴケ、ヒメミズゴケがシユレンケをうめて、イソツツジ、ヒメシヤクナゲなどの寒地性、高山性植物が群生し、湿原のお花畑を形成する。食虫植物のモウセンゴケやコウマキモ、ムラサキミシカモグサは、一見、

静かな湿原の自然をダイナミックに演出している。

ミズゴケ湿原の周囲は、ほぼ

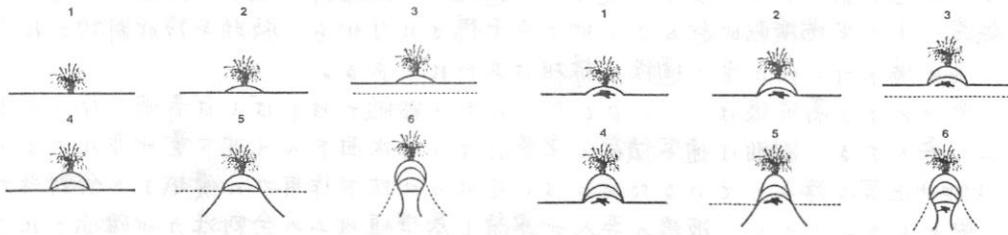
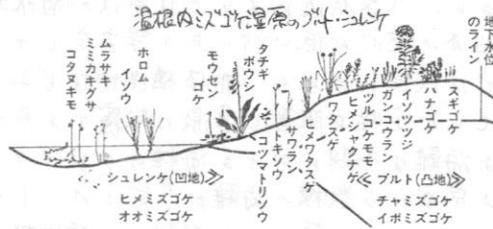


同心円状に帯状のヌマガヤ湿原をはさんで、ヨシ・スゲ湿原に面する。ヌマガヤ湿原は両者の中間の性状をなし、わい生低木のツルコケモモが密生して、ワタスゲ、サヤスゲ、ヒメワタスゲが群生し、夏の白い湿原をつくる。

釧路湿原の特徴的な景観にヤチボウズ(スゲ類叢生)がある。これは、カブスゲ、ヒラギニスゲなどの旺盛な分けつ作用と、凍結などによる土壌の隆起、あるいは流水による土壌の流亡などによるもので、数十年で50-60cmの高さに隆起し、中には古株を核とする帯もある。

また、シベリヤ、サハリンに自生し、釧路湿原に不連続に分布するクシロハナミ(グハハタタネウケビナモ、当地の自然を特徴づけている。

近年、釧路湿原の将来について、様々な論議がかわされ、(国立公園指定による)湿原の保全と健全な利用を定める方策も提示された。ともあれ、数千年の年月を経て、今もなお2万haをこえる地積を保つ2、原生に近い自然の姿を残している釧路湿原については、柳土の自然としてばかりではなく、ラムサール条約指定湿原であることからみよように、地球の見地からの保全を求めたいものと思う。



1. 2. スゲが分けつをくりかえす。
3. 4. 土壌が隆起する
5. 6. 土壌が流亡する。

<古株を核とする場合、>
-より隆起する-